境毅（ペンネーム榎原均）を偲ぶ

新開純也（「反戦・反貧困・反差別共同行動IN京都」代表）

境毅（旧姓・竹内毅）＝榎原均（俗称バラキン）が八月五日急性心不全で亡くなった。享年八十三歳。

僕にとっては、一九五九年京大同期入学の、六〇年安保闘争以来の友人である。

彼は理学部に入学、同じクラスに後にノーベル賞を受賞した利根川進や、京大学長になった尾池和夫がいた。境は近年もクラス同窓会の幹事をやっていた。

一九五九年といえば、すでに六〇年安保闘争が始まっていた。その前年五八年には共産主義者同盟（第一次ブント）が結成され、京大でも先輩の今泉、北小路、佐野、小川氏などによって共産党京大学生細胞を割ってブントが結成されていた。「新しい党」を結成したばかりの彼らにとって、六〇年安保闘争は、浮沈をかけた運動でありそのためには、新しく入学してきた我々の世代をつかむことが必須であった。そして我々の世代は安保闘争の中で多くの活動家を生み出し、ブントに参加した。第二次ブントの書記長の渥美、京都府学連委員長として名アジテーターだった清田、後の京大パルチザンの「白樺」の高瀬泰司、あるいは熊取六人衆の一人小林圭二等数十人のブント党員がいた。そこに境も僕もいた。この世代が、第一次ブントの崩壊後のいわゆる「関西ブント」の骨格を作り、やがて塩見、八木、高原たちの「赤軍派」世代を「育て」第二次ブントを結成していく。

関西で行った「偲ぶ会」で誰かが言っていたように、そのころの境は、目立った理論家やアジテーターではなかったが、抜群の事務能力があり、当時よくあったはてしなき議論の後で、「ではこうしよう、その役割分担はこうでタイムスケジュールはこうだ」と落ちをつけるのは境だった。機関紙編集も彼がやっていた。

境の活動は一九七六年〜八三年の七年にわたる獄中生活を挟んで前期と後期に分かれる。前期はR・G派としての軍事活動を含む政治活動であり、後期は生活協同組合などを含む社会運動である。

境は一九七〇年前後のベトナム反戦闘争ー七〇年安保闘争や全共闘運動の中で、その限界と突破口を「軍事」に求めた。その点では赤軍派と共通する。単純化していえば、赤軍派の塩見達がその突破口を「国際根拠地」論のような戦略・戦術に求めたのに対し、境たちR・G派は「共産主義」に求めたといえよう。彼がどこかで書き、またしばしば彼の口から直接聞いたことがあるが、「軍事闘争をやれば共産主義が問われる」と。僕はこれに強い違和感を持っていたし今もそうだ。人が共産主義者になるのは、貧困や戦争や一言でいえば世の（資本主義）理不尽への怒りである。

僕はこの時ブント全国委員会＝「烽火」派（俗称八木沢一派）を創った。時代認識として、もう軍事の時は終わったのだということもあったが、それ以上に、革命路線として先進国では党ー軍ー根拠地型ではなく、党ー評議会（ソビエト）ー武装蜂起の型であると思っていたからである。（今もそう思っている）

境と一旦決別していた時代である。

境は、出獄後の後期、一転して社会運動家へと転身したように見える。事実生活協同組合の設立に参加したり、若い人の社会的連帯経済の試みを支援したりしていた。しかし、そこにはR・G派活動に代表される前期の活動の独特な総括を通した連続性があることは言うまでもない。彼にとって個々の新しい社会運動が問題なのではなく、その社会運動を通した社会変革＝共産主義から離れることはあり得なかった。

彼は「従来の運動ーそれは広義にはロシア革命以降の、狭義には日本のR・G派を含む新左翼運動ーは、商品関係あるいは物象化を国家権力を手にすることで変革しようとした。しかし、人々の無意識の共同行為たる商品関係を上からの国家権力で変えられるものではない、下から掘り崩す社会運動と、物象化に基づく資本主義による人々の意思の支配を変革することが必要なのだ＝陣地戦が必要」（以上は新開の要約）と総括している。（ここには彼が深く研究してきた資本論の彼の「読み」がある、それに触れるべきだが、その道の人にお願いする）

僕が運動圏に戻ってきて境としばしば会うようになり、やがてルネサンス研究所を立ち上げ一緒に活動するようになった。折にふれて議論になったのは上記した総括の視点であり、いわゆる社会革命か、政治革命かである。良くも悪くも、もはや決別するほどの若さはなかったが、いつもこの点をめぐって分岐が生じた。お互いに相変わらず頑固に意見を変えないなと思いながら。資本主義はその経済体制と国民国家一体のものであり、国民国家打倒なしの変革はあり得ない。同時に「平時」からの社会運動、社会変革無しに革命はあり得ない。僕は昔からグラムシを高く評価してそのことを言ってきたつもりだ。

境は、同期では最後に亡くなる人だと理由もなく思っていたが、突然に死が訪れた。もう少しは生きて革命論を深めたかったであろう。

同期には理屈を超えたアイデンティティーがある。どんなに論争し、かつて一度は決別しても、若き日に共にした闘いの日々のきずなは変わらない。仲間内での彼の呼び名「たけっちゃん」長いこと有難う。ご苦労様。